

青年期の学生における親和動機と対人不安に関する研究

- TAT 物語の分析を通じて -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
桶谷 歩

本研究の目的は「親和動機（対人志向性）」と「対人不安」という2つの尺度に基づいて、青年期の対人関係にかかわる心理について考察していくことである。親和動機（対人志向）とは、人々をして他の人との接触、交流をはからせ、友好的な関係を作り出させる社会的行為の源泉ともなるべき人間の要求である。対して対人不安とは対人的な原因によると考えられる不安の総称であり、本研究においては主として、人とコミュニケーションをとる上で感じられる不安感情としてとりあつかった。

本研究ではこの2つの尺度がどのように青年期の対人関係に影響を及ぼしているかを検討するために、2つの尺度とTAT図版3枚からなる質問紙を配布・回収するという方法で調査を行った。TATを用いたのは対人関係における基本的な行動様式やイメージが表れやすいということに加え、サンプルの収集が比較的容易であると考えられたためである。

質問紙の回収を終えた時点で、最終的な有効回答者は170名であり、この170名について分析を進めていった。まず、尺度得点を合計し、その相関関係を調べた結果、 $r=.106(n.s.)$ であり、有意な相関関係は見出されなかった。続いて下位尺度間の相関関係を検討したところ、8つの下位尺度の組み合わせにおいて有意な相関関係が見つかった。つづいて2つの尺度の高低の組み合わせにより、青年を4つのクラスターに分類したところ、第1クラスター49名（「低対人志向 低対人不安」群）、第2クラスター36名（「低対人志向 高対人不安」群）、第3クラスター38名（「高対人志向 低対人不安」群）、第4クラスター47名（「高対人志向 高対人不安」群）となった。さらにクラスター間の差異を明確にするために中間層を取り除いた118名について、TAT物語を分類・集計した。集計結果について²検定を行ったところ、一つの図版の物語内容の分類において、有意な度数の偏りが検出された（ $\chi^2(12)=30.150, p<.01$ ）。

この結果からまず対人不安と対人志向との関係性はある性質に対する異なる側面からの評価、という関係の方が近いと結論された。そして、4つのクラスターについて第1クラスターは対人関係に依存せず独立して生き抜く力を持った群、第2クラスターは問題から逃避的な行動を繰り返して自身を追い込む危険性を持った群、第3クラスターまた対人関係を豊かに保ち、情緒的にも健全な傾向を持った群、そして第4クラスターは対人関係の葛藤を抱えながらも前に進んでゆく力を持つ群であると考察された。4つのクラスターの傾向から、対人志向の低さに対人不安の高さが加わったとき、対人関係の問題において自身をより深刻な事態に追い込むような気質が表れやすいと考えられる。

またここから、このようなタイプの青年への支援として対人不安を低減するような環境づくりを進めていくことが有用であることが示唆された。